

泉涌寺仏牙舍利と請来者湛海について

大 谷 由 香

一 はじめに

泉涌寺の仏牙舍利は、謡曲「舍利」の題材に選定されるほどに道俗に知られた存在であったはずだが、その請来時期を始めとして、実際には不明な点が多い。

本稿は、泉涌寺仏牙とその請来者湛海に関する新出記事を紹介して、今後の研究の一助としたい。

二 泉涌寺仏牙と請来者湛海に関する新出記事二点

今回紹介する新出記事は、智積院新文庫蔵『視覃雜記』に掲載されたものである。『視覃雜記』⁽¹⁾については、すでに他稿にて書誌情報も含めて紹介してあるので、詳細はそちらを参照願いたい。この史料は、泉涌寺を中心とする律宗寺院での慣例や口伝などが、箇条書きで記されたもので、僧長典によつて、一五一九―一五三〇年頃にかけて徐々に書き足されながら制作されたと考えられる。

湛海と仏牙舍利についての記事は、全二五五条のうち、第一七五条と第二二六条である。以下に本文と大谷による書き下しを挙げる。なお、本文中「／」は改行、「」は改頁を示す。

〔第一七五条〕

一 泉涌寺舍利会来者^山 湛海首座再入宋請来也 開山宗師／示寂^{四年目}後○入寺也 開山□入寺也 依之海首座一向予於泉涌寺／無之者 舍利会則御仏事也^矣 天王寺勝鬘院開山湛海首座也 此寺本尊愛染明王也 寮額^列等在之事(二九丁表)

(書き下し) 一 (c) 泉涌寺舍利会の由来は、湛海首座、再入宋の請来なり。開山宗師示寂の(四年目の)後、(後堀河院寛喜二年)の入寺なり。開山□入寺なり。これに依り、海首座は一向に泉涌寺に於いてこれ無き者をば^{あた}予える。舍利会とは則ち御仏事なり。(d) 天王寺勝鬘院開山は湛海首座なり。この寺の本尊は愛染明王なり。寮額には^列等、これ在りとの事。

〔第二二六条〕

一 泉涌寺仏牙舍利勅籤^記筆

泉涌寺仏牙舍利と請来者湛海について(大谷)

二二〇

右 当寺仏牙舍利者 如来滅茶毘之砌 人鬼／畜群集之捷疾羅刹
受多聞之勅 隱身形取仏牙 厥後南山大師／西明寺中夜行道 那
吒太子獻大師 々々授綱律師 從爾以降 支那一天／崇之 道俗
四衆歸之 爰当寺湛海首座号文陽坊 開山直弟 企星宿 二度／往還 日域安置
(大九) 誓 速詣白蓮金刹 俄獲赤泉靈宝 寛喜二年降臨当山 君臣尊
崇絶倫 道俗帰敬／伺隙 然間国家貴重之余 至徳二年季春後九
／上皇後小松院忝致礼拝自下 勅箴止 聊爾出現仏牙威徳自門秀高也／
非 勅命者不可開封 与不見是仏化莫謂慳惜矣／
至徳二癸丑年六月 日住持沙門聖皇謹識
仏牙之入寺者 八十五代主後堀河院 寛喜二年也 百二代主後小
松院／至徳二年三月廿九日勅箴也(四四丁表裏)
(書き下し) 一 (a) 泉涌寺仏牙舍利勅箴記

(b) 右、当寺の仏牙舍利は、如来滅して茶毘の砌、人鬼畜群集の捷
疾羅刹、多聞の勅を受け、身形を隠し仏牙を取る。その後南山大
師、西明寺中(において)夜に行道するに、那吒太子大師に献ず。
大師文綱律師に授け、それより以降、支那一天にこれを崇び、道
俗四衆はこれに帰す。(c) ここに当寺、湛海首座(文陽坊(聞陽
房)と号す。開山の直弟なり)、星宿を企み、二度往還して、日
域安置の大誓(を立て)、速やかに白蓮金刹に詣で、俄かに赤泉
(中国)の靈宝を獲る。寛喜二年(私に云く後堀河院の御宇な
り。開山和尚の滅より四年目の後なり)当山に降臨す。君臣尊崇
絶倫にして、道俗帰敬の隙を伺う。(e) 然る間、国家貴重之余、
至徳二年季春後九(日)、上皇(後小松院)忝なくも礼拝致して
より下に、勅して箴止す。聊爾出現の仏牙の威徳は自門秀高な
り。勅命にあらずんば、開封すべからず。この仏化(仏の化
身)の不見に与するは、いわれなき慳惜なり(不見に与するもこ
れ仏化(仏教化)なり。慳惜ということなかれ?)。(a) 至徳

二(癸丑)年六月 日住持沙門(聖皇)謹んで識す。仏牙の入寺
は、八十五代主後堀河院寛喜二年なり 百二代主後小松院至徳二
年三月廿九日に勅箴なり。

これらの記事によって確認できるのは、以下の五点である。

(a) 「泉涌寺仏牙舍利勅箴記」の存在

『視覃雜記』第二二六条は、至徳二年(一三八五)六月に、
当時の泉涌寺長老であった竹岩聖皇(第二十一代)によって
記された「泉涌寺仏牙舍利勅箴記」(以下「勅箴記」と略)の
転載である。これまでこの史料の存在は知られてこなかった。
泉涌寺仏牙舍利に関する史料は、建武三年(一三三六)に第
十世長老全信が記した『仏牙舍利縁起』⁽²⁾が最も古く、「勅箴
記」はそれに次いで古い史料である。

(b) 泉涌寺仏牙は道宣ゆかりの釈迦遺物

「勅箴記」には、泉涌寺仏牙の縁起が述べられる。釈迦の
遺体を茶毘に付した時、捷疾羅刹が多聞天の勅命を受けて仏
牙を盗んだ。南山宗祖道宣は、ある夜、西明寺を歩いていた
時に、多聞天の子である那吒太子に出会い、その仏牙を感得
する。道宣はこれを弟子の文綱に授け、以来この仏牙は國中
の尊崇を得ることとなった。これこそが湛海請来の仏牙であ
る、というものである。「勅箴記」は泉涌寺仏牙について、
こうした縁起を紹介する史料の中、最古のものである。

これは『大般涅槃經後分』卷下「聖軀廓潤品第四」(以下「涅槃

槃經後文」と略)と、『宋高僧傳』卷十四「唐京兆西明寺道宣伝」(以下「道宣伝」と略)にそれぞれに説かれる仏牙のエピソードを折衷したものである。『涅槃經後分』には、釈迦の遺体を荼毘に付した後、帝釈天が上顎右の牙舍利を取って天上に還り、塔を建てて供養しようとしたが、二匹の捷疾羅刹が隙を見てその仏牙を盗んだというエピソードが紹介される(『大正』一一、九一〇頁上)。また「道宣伝」には、夜に西明寺を歩いていた道宣が「毘沙門天(≡多聞天)の子那吒」と名のる少年に出逢い、仏牙を授かった。その仏牙は弟子の文綱に託されて崇聖寺の東塔に収められ、後に西廊に建てられた塔に移された、というエピソードが紹介されている(『大正』五〇、七九一頁上)。

どちらも仏牙について説かれたものではあるが、本来二つのエピソードに関連はない。

実は、このように『涅槃經後分』と「道宣伝」を折衷した縁起を持つのは、泉涌寺の仏牙だけではない。ほぼ同様の縁起を持つ仏牙が、少なくとも日本には他に三点確認できる。

一点目は現在京都の報恩寺に所蔵される仏牙である。これは叡尊が室町女院から寄進されたもので、もとは葉室浄住寺にあったという。一三七〇年頃までに成立したと考えられている『太平記』卷八「谷堂炎上事」には、浄住寺の仏牙について、釈尊滅時に捷疾が盗んだ仏牙舍利を韋駄天が奪取し

て、後に道宣に与えたものである、という謡曲「韋駄天」を彷彿とさせる逸話を紹介している。叡尊は浄住寺に仏牙を納めるにあたって、弘安十年(一二八七)八月八日付で置文を作成しているが、これには「右牙舍利者、曩祖終南山ノ律師所^{ロナリ}感得^{シ玉フ}也(其旨見相伝次第)」(『西大寺叡尊伝記集成』(法蔵館、一九七七)一九二頁)とある。樹下文隆氏は、ここに述べられる「相承次第」を、『正統院仏牙舍利記』(西教寺蔵)に収められている「葉室山浄住寺仏牙舍利相伝次第」と推測し、これが『太平記』の下敷きとなった縁起であると考えられているようである。⁽³⁾「葉室山浄住寺仏牙舍利相伝次第」に説かれる縁起は「勅箴記」に説かれる泉涌寺仏牙のものとはほぼ同様である。

二点目は奈良の菩提山正暦寺にあったとされる仏牙である。正暦寺仏牙の縁起である「菩提山中尾舍利伝」は、これを禅実房宣胤から借りた尋尊によって『大乘院寺社雜事記』(文正元年(一四六六)閏二月四日)に書き留められている。ここでは道宣ではなく道安に舍利が施与されたとされるが、その他の点については、やはり「勅箴記」に説かれる泉涌寺仏牙とはほぼ同内容である。

三点目は鎌倉円覚寺の仏牙で、その縁起を記した春屋妙葩(一二三二―一三八八)の『仏牙舍利縁起』には、毘沙門の子の名が「張瓊」とされるものの、その他の点については「勅

泉涌寺仏牙舍利と請来者湛海について(大谷)

二二二

箴記」とほぼ同内容の縁起が紹介されている。同様に円覚寺仏牙の縁起を説く。また『正統院仏牙舍利記』(西教寺蔵)に納められる「万年山正統院仏牙舍利略記」(一三五二年天沢宏潤識)には、『涅槃経後分』と「宣律師伝」を引用して縁起が説明されている。

このように日本各地の仏牙は、十五世紀くらいまでの間に同型の縁起がしきりと作成されたことを確認できる。なお同時期には「舍利」や「韋駄天」などの仏牙を題材とした謡曲も作成されており、関連が指摘されている⁽⁴⁾。

(c) 湛海が仏牙を持ち帰ったのは寛喜二年

また上記二点の記事には、仏牙の請来年を、共通して「後堀河院寛喜二年(一二三〇)」であるとす。第一七五条には「再入宋請来」、第二二六条には「二度往還」と見えるので、これが湛海の二度目の渡宋時であったことがわかり、この請来によって、泉涌寺では舍利会が執り行われるようになったという。

西谷功氏は、湛海の伝記内容を検討し、湛海に関する記事を新しく収集して湛海伝の再構築を行い、湛海の入宋は『本朝高僧伝』などに記載される二回よりも多く、計五回にのぼり、またそのうち二回目の渡宋となる安貞二年(一二二八)九月八日の帰朝時に仏牙を持ち帰ったのではないかと推測されておられる⁽⁵⁾。

しかしこれら安貞二年説を記す史料群よりも早くに成立した史料に寛喜二年説が述べられている点には注意が必要であろう。

(d) 湛海は四天王寺勝鬘院の開山である

さらに「第一七五条」によれば、泉涌寺仏牙を請来した湛海は、四天王寺勝鬘院開山であるとされる。四天王寺勝鬘院は、寺伝によれば聖徳太子建立の施薬院に端を発するとされ、太子がここで『勝鬘経』を講説したために勝鬘院と呼ばれるようになったとされる。本尊は愛染明王で、地域では愛染堂、愛染さんと親しまれている寺院である。寺伝には残らないが、律院としての中興開山を湛海に求めているのが「第一七五条」である。ここでも本尊は愛染明王とされており、遅くとも『視覃雜記』成立の十六世紀には勝鬘院の本尊は愛染明王であったことが明らかである。

しかし『視覃雜記』よりも三百年近く早く成立している天野山金剛寺の聖教には、「求法沙門思融(勝鬘院開山長老/相意上人)⁽⁶⁾」の書写本が多く伝えられており、『視覃雜記』の湛海開山説と異なる。

思融については牧野和夫氏がすでに諸論文に行状等をまとめておられる⁽⁷⁾。凝然『円照上人行状』(一二三〇二年成立)によれば、「思融(後改円珠)上人」(『続々群書類従』三、四九九頁上)とあって、思融が後に円珠と名乗ったことが知られる。

同書には、泉涌寺智鏡・道玄の弟子であった円珠と「思順」が、弘長嘉暦年間には共に円照のいる鷲尾に移り、その三年後に共に「天王寺勝鬘院」に住して密教を弘めたこと（同、四八五頁下）、弘長年中（一二六一～六四）に仏法大徳から円照へと施与された家原寺を、後に譲られたこと（同、四八七頁下）などが記されている。

思融（＝円珠）は思順と行動を共にすることが多かったようであるが、『続仏祖統紀』卷之一「法照伝」（『続蔵』七五、七三九中）には、湛海と思順とが法照に参学したエピソードが紹介されているから、あるいはこうした〈思順のツレ〉の伝承が混濁した結果として、元来思融開山であったものが、後に湛海にまで遡らせて伝えられるようになったのかもしれない。

(e) 泉涌寺仏牙舍利は至徳二年より勅封状態となる

「勅蔵記」の主旨は、至徳二年（一三八五）三月二十九日、後小松院が礼拝したのをきっかけとして、泉涌寺の仏牙が勅封されたことを述べることにある。

先ほど紹介した元浄住寺仏牙も、叡尊に仏牙を委託した室町院が没した（一三〇〇年）後に勅封の打診があったことが『報恩寺牙舍利縁起』に明らかであるし、円覚寺正統院の仏牙も応永三年（一三九六）に義満により京都に召し上げられたという（『鎌倉管領九代記』）。

泉涌寺仏牙舍利と請来者湛海について（大谷）

大塚紀弘氏によれば、仏牙は北宋では皇帝が厳重に管理しており、浄住寺仏牙の勅封打診はその故事を踏まえての行為だった可能性が指摘されている⁽⁸⁾。他の仏牙も同様の指摘がでるかもしれない。

三 まとめ

以上に『視覃雜記』に掲載される泉涌寺仏牙と湛海に関する短い記事二点を紹介した。これらの新出記事は、対外交流史、仏教史などの歴史学のみならず、寺院における伝承のあり方などをうかがう上で、仏教学や国文学にも資するのではないかと思う。

- 1 拙稿「[資料紹介] 智積院新文庫所蔵『視覃雜記』について」(『智山学報』六一、二〇一二)。
- 2 雲龍院蔵『万花鏡』卷三所収(西谷功「泉涌寺創建と仏牙舍利」(『戒律文化』七、二〇〇九)の紹介による)。足利氏の「乱責悪行」によって紛失した古雲元粹の「伝来記」に代わり、第十世長老の全信が記したもの。湛海が二度渡宋の後に仏牙を将来した粗々のことが書かれているものの、湛海帰朝年、仏牙請来年については一切触れない。
- 3 樹下文隆「〈舍利〉と〈韋駄天〉」(『芸能史研究』一〇五、一九八九)。
- 4 樹下文隆前掲論文(注3)。
- 5 西谷功前掲論文(注2)。

泉涌寺仏牙舍利と請来者湛海について(大谷)

二二四

6 『河内長野市史』巻五・史料編二(一九七五)所収の『玄秘鈔北斗法』奥書など。

7 牧野和夫「思融—良含」周辺のこと・杭州出自の宋人のこと——「軍記物語と東アジアの仏教世界」補遺——(『実践国文学』八〇、二〇一一)、「延慶(本)奥書・応永書写『平家物語』四周の書物ネットワーク——「軍記物語と東アジアの仏教世界」——(『軍記と語り物』四八、二〇一一)など。

8 大塚紀弘「日宋交流と仏牙舍利——五台山から来た仏牙舎利の行方——」(『日本歴史』七五九、二〇一一)。

〈付記〉

本発表のための『視覃雜記』の閲覧・複写等に際し、真言宗智山派御当局、石川隆教師(智山年表編纂室主幹)、田口秀明師(智山年表編纂室助手)に、多大なるご高配、ご厚恩を賜りました。記して感謝申し上げます。本稿は平成二十四年三月に近江で行われた倭寇の会にて報告したものを元に作成した。報告に際してさまざまなご意見くださったメンバーの方々に感謝申し上げます。また執筆にあたっては、西谷功氏に多くのご教示をいただいた。ありがとうございました。

(本稿は平成二十五年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。)

〈キーワード〉 竹岩聖皐、道宣、四天王寺勝鬘院、「泉涌寺仏牙

舍利勅籤記」、『視覃雜記』、謡曲、入宋

(日本学術振興会特別研究員RPD)

新刊紹介

空海(金 希泰) 著

中国宋代天台教学の研究

特に浄覚仁岳を中心として

A五判・三三四頁・本体価格八、五〇〇円
山喜房佛書林・二〇一三年四月